

第八回『リア王』(11月14日)復習

第八回の復習に先立ち、『リア王』のテキストの問題に少し触れることにいたします。神父様も言及なさいましたが、『リア王』はシェイクスピアの生前、1608年に四つ折り本(Q1) *The Historie of King Lear* が出版されました。その後、1623年出版の第一・二つ折り本(F1)には、*The Tragedie of King Lear* が収められています。この二つの『リア王』はタイトルの違いを含め、かなりの相違がございます。大まかに数字を申しますと、Q1に存在してF1にはない台詞が約300行、逆にF1に存在しQ1にない台詞が約100行、意味に関係する異同が約1500か所ございます。

18世紀以降、『リア王』のテキストは、Q1とF1を合成したテキストが編纂されて参りましたため、『リア王』と申しましても、編纂者の異なる出版社ごとに、本文は微妙な違いを示しております。1970年代、『リア王』のテキスト解釈に大きな変化が起きました。即ち、F1はQ1の改訂版だという説が力を持ち始めたのです。この説を唱えたGary Taylorが、Stanley Wellsと共にGeneral Editorsとして編纂した1986年出版のOxford版シェイクスピア全集(*William Shakespeare: the Complete Works*)では、Q1とF1の二種類の『リア王』を収めています。仮に改訂説が正しいと判断したとしても、改訂前のQ1を別作品とみなして、F1の『リア王』と並列して出版する編纂のあり方に批判も多いのですが、二つの『リア王』を比較してみるのも一興かと存じます。

神父様のお話に戻りますと、ジェイムズ朝の悲劇『オセロ』、『マクベス』、ところが『リア王』は受難劇と区別なされたのです。『リア王』が他の二つの悲劇と異なる点は、“Double plot”にあると指摘されました。『リア王』では、二つの筋が並行して進行するのです。主筋(“Main plot”)は、ホリンシェッド(Holinshed)の『年代記』(*Chronicles*)から、副筋(“the Secondary Plot”)は、サー・フィリップ・シドニー(Sir Philip Sidney, 1554-86)のロマンス『アルカディア』(*Arcadia*)から材源を得ました。二つの筋が見事に絡み合っています。第四幕目のコーディアと出会いは“the happiest of happy endings”、ところが第五幕は“the saddest of sad endings”に転じます。受難劇はキリストの御受難から復活の喜びに至りますが、『リア王』では、その順序が逆転しているのです。

James Shapiroが2015年に出版した *1606: William Shakespeare and the*

Year of Lear の書評をお書きになった神父様は、リア王の王国分割と当時ジェームズ一世 (James I) が提案した England と Scotland 統合の問題を重ねて論じた 1606 では、新訳聖書の意味とレキュザントの問題が看過されていると指摘されました。『リア王』は、王国分割で劇が始まるのではなく、三人姉妹の愛情表現のコンテストでコーディリアの 発した“Nothing”の言葉で劇が始まる点を強調されました。

次に、『リア王』のテーマである三つの“N”の重要性を指摘なさいました。最初の“N”は“Nothing”。キリスト教では神が無から天地創造されたと考えます。コーディリアの「無」 (“Nothing”) はキリスト教的な意味で「全て」 (“Everything”) を意味します。ところが、リア王は“Nothing”をアリストテレス的な「無」 (“Nothing”) と理解しました。

第二の“N”は“Nature”でございます。“Nature”は多様な意味をもつ言葉でございますが、『リア王』の“Nature”は、英国のロマン派の詩人ウィリアム・ワーズワース (William Wordsworth, 1770-1850) の考える大自然の意味ではなく、親子の理想的な関係を意味しています。親は子を慈しみ、子は親をいたわるのが人間の自然の情愛でございます。リア王とグロースター伯は、この自然の情愛に反した行動に出ました。それに対して、コーディリアはリア王に、エドガーはグロースター伯に子としての自然の情愛を示し、親を大切にします。

第三の“N”は、発音が [n] で始まる“Knowledge”を指します。正確には“Self-knowledge” (自己認識) を意味します。“Who am I?”と問うリア王は、自己認識が欠如しています。王が自己認識を得る過程で、三人の師が登場しました。最初の師は、リア王の影法師としての道化、次に名前を失いトムに変装したエドガー、最後にコーディリアでございます。コーディリアの名前が「リア王の心」を意味するように、リア王はコーディリアを通して自己認識を得ることになるのです。

リア王の問いに、キリストを思わせるコーディリアは、“And so I am, I am!”と神の名を響かせる返答をし、キリストの復活を印象づけています。その意味で、第四幕は“the happiest of happy endings”を迎えるのです。ところが、第五幕では、事情は一転します。フランス軍がエドモンド率いるブリトン軍に敗北し、二人は捕らえられてしまいました。舞台には、牢獄で絞殺されたコーディリアを抱いたリア王が登場し、劇は“the saddest of sad endings”で終わるのです。

メタ・ドラマの視点から劇を読み解きますと、第四幕でキリストのイメージと重なるコーディリアの復活の喜びの後、第五幕の受難で、コーディリアを抱

くリア王が、キリストを抱くピエタの姿を想起させます。さらに、コーディリアを拒絶したリア王と、カトリックの信仰を拒絶したヘンリー八世の姿が重なり、追手に追われ逃げ惑うエドガーは、当局に捜索されるカトリックのレキュザントの姿が重なります。また、国外追放を命じられても帰国し、変装してリア王を支えるケント伯はイングランドに潜入したカトリックの司祭の姿と重なり、カトリック迫害を命じたエリザベス一世の存在が劇中に感じられると神父様は、劇の深奥にあるカトリック的な意味を丁寧に説明されました。

第二部の質疑応答：

質問1：ソネット集と『リア王』の“Nature”の意味の違いに関する興味深い御質問がございました。

お答え：神父様は、ソネット集の“Nature”は、全ての被造物の動き、四季の推移を描いているけれども、『リア王』では親が子を子が親を大切に自然の情愛を描いているとお答えになりました。

質問2：『リア王』における“Nothing”は、「空」、禅（般若心経）における「無」とはどのような違いがあるのでしょうか？という質問がございました。

お答え：神父様は、西洋では「無」（“Nothing”）をそれほど大切にはせず、「存在」（“Being”, “Existence”）を大切にします。東洋では「無」や「空」（“Non-existence”, “Non-being”）を大切にするのが特徴です。『リア王』ではキリスト教的な「無」は全てであるというコーディリアの価値観と、アリストテレス的な「無」は何もないというリア王の価値観が描かれていると重ねてご説明下さいました。

さらに、イエス様の謙虚さ（“kenosis”）、つまり、イエス様が人間の姿を取ることによって神性を放棄され、自らを空になさったキリスト教における“Nothing”をご説明くださいました。

質問3：『ハムレット』では、前半ではウィットテンバーク大学の学生であるハムレットの若さが描かれますが、劇の後半で30歳であることが判明します。シェイクスピアは時間のトリックを使って若いハムレットと成熟した思索的なハムレットを書き分けています。『リア王』においても同様に、はじめリアの年齢は示されませんが、末娘が結婚を控えていることを考慮すると老人という印象はございません。ところが、後半に80歳と年齢が明示されます。40歳半ばか後半で亡くなる方が多い時代、80歳の老人に出会うことは少な

ったと思われます。シェイクスピアがリア王を 80 歳に設定した理由と 90 歳になれた神父様の 80 歳の時の実感を教えて頂けますか？

お答え：神父様は、先ず、リア王は、もっと学ぶ必要があったとおっしゃり、神父様ご自身がイエズス会士として上智大学で教鞭を取られるまで 20 年間の学びの時期を過ごされたことなどのエピソードを披露されました。

慣例に従いまして、『リア王』の第三幕第二場の嵐の場面の“Blow, winds, and crack your cheeks!..”、次に第四幕第七場でリア王がコーディリアと再会する場面の“Pray do not mock me...”、最後に第五幕第三場でリア王がコーディリアの遺体を抱いて登場する場面の“Howl, howl, howl, howl!...”を神父様に倣って朗読し、第八回が終了いたしました。